

コハクチョウの食圧で被度が低下した マコモ群落上を利用する鳥類

渡辺朝一

310-0032 水戸市元山町 2-2-33-202

茨城県菅生沼には、毎冬200羽以上のコハクチョウ *Cygnus columbianus* が飛来し、越冬する（柳沢ほか 2003）。菅生沼に飛来するコハクチョウにはパンの給餌が行なわれている。コハクチョウは、給餌されるパンの他、開水面の周囲に広がるマコモ *Zizania latifolia* 群落で、マコモの地下茎を採食している（渡辺 2002）。コハクチョウの採食圧を受けたマコモ群落は、枯れた稈の被度が低下し、泥が露出するようになる代掻き現象を起こす（渡辺 2003, 図1）。

代掻き現象を起こしたマコモ群落は、例えばコハクチョウやオナガガモ *Anas acuta* に休息地として利用される（渡辺 2005）など、前年の枯れた稈が残るマコモ群落とは、異なった役割を果たしているものと予想される。本稿では、代掻き現象を起こしたマコモ群落上を利用するコハクチョウ以外の鳥類を紹介する。



図1a. 冬期のマコモ群落の概観(a)

表 1. 被度が低下したマコモ群落上で観察されたコハクチョウ, オナガガモ以外の鳥類

2005. 1. 3	マガモ	♂2	群落上を歩きながら泥の中に嘴を入れて採食
	オナガガモ	53	群落上を歩きながら泥の中に嘴を入れて採食
	イカルチドリ	1	歩行、停止、ついでついでを繰り返す。
	タゲリ	2	歩行、停止、ついでついでを繰り返す。
	タヒバリ	2	歩きながら、とりおり地表面をついばむ。
	ツグミ	1	ホッピングで移動しながらときおり地面をつつく。
2005. 1. 29	アオサギ	1	群落上で休息。
	タゲリ	1	歩行、停止、ついでついでを繰り返す。
	ハクセキレイ	3	歩きながら、とりおり地表面をついばむ。
	タヒバリ	2	歩きながら、とりおり地表面をついばむ。
2005. 3. 6	アオサギ	1	群落上で休息。
	タゲリ	1	歩行、停止、ついでついでを繰り返す。
	タシギ	1	嘴を地中に差し入れ、上下して食物を探す。
	タヒバリ	1	歩きながら、とりおり地表面をついばむ。
	ツグミ	3	ホッピングで移動しながらときおり地面をつつく。
	ハシボソガラス	2	群落上に降下、降り立ち、2・3回地面をつつく。

調査地の菅生沼は、茨城県西部に位置する池沼で、茨城県自然環境保全地域に指定されているが、近年陸化が進んで開水面が狭まっている（小幡ほか 1996）。コハクチョウは給餌が行なわれている上沼といわれる開水面周辺に飛来するほか、近年では工事で開水面が広がった下流域でも多く見られるようになった。

調査は、上沼周辺で2004年11月23日、2005年1月3日、1月29日、3月6日の4回行なった。上沼周辺の、一帯のマコモ群落上を見渡すことのできる定点から、マコモ群落上にいる鳥類の種類と個体数を記録した。コハクチョウに関しては、マコモ群落を採食

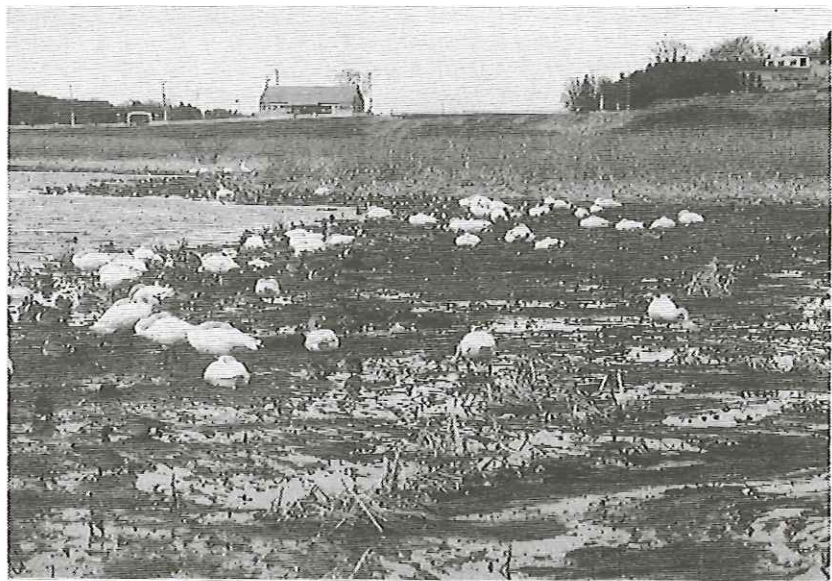


図1b. 冬期のマコモ群落の概観(b)

地としてあるいは休息地として、オナガガモに関してはマコモ群落を休息地として利用することを紹介する。そのため、コハクチョウの記録は省き、オナガガモに関しては休息の記録は省いてマコモ群落上での採食の記録のみを表に示した。

4回の調査日におけるマコモ群落上で見られた鳥類を表1に示した。

11月の調査では、マコモ群落はほとんどがマコモの枯れた稈に覆われていた。少数のコハクチョウが群落上に上がってマコモの地下茎を採食しているのと、少数のオナガガモが、水面ギリギリの岸辺に上がって休息しているのが見られた以外は、マコモ群落上を利用する鳥類は観察されなかった。1月3日の観察では、マコモ群落の三分の一以上の面積に代掻き現象が広がり、泥が露出していた。1月3日の観察では、マガモ *Anas platyrhynchos* ♂2羽、オナガガモ53羽が、マコモ群落上を歩きながら嘴で泥の表面をつついたり、ごく浅く土の中に入れてたりして採食していた。このほかに、イカルチドリ *Charadrius placidus* 1羽、タゲリ *Vanellus vanellus* 2羽、タヒバリ *Anthus apinoletta*、ツグミ *Turdus naumanni* 1羽が見られた。これらは、いずれも群落上で採食していた。1月29日には、アオサギ *Ardea cinerea*、タゲリ、ハクセキレイ *Motacilla alba*、タヒバリが、3月6日にはアオサギ、タゲリ、タシギ *Gallinago gallinago*、タヒバリ、ツグミ、ハシボソガラス *Corvus corone* が見られた。アオサギが休息していた他は、いずれの種も群落上で採食していた。コハクチョウ、オナガガモに関してはいずれの調査日においても多数が利用するところが見られた。

本調査において、マコモの稈の倒伏が進まず、代掻き現象が起きていない11月にはマコモ群落上を利用している鳥類がごくわずかであった。しかし、代掻き現象が進んだ1月以降の観察では、少数ではあるが群落上で採食する鳥が認められた。これらの種、イカルチドリ、タゲリ、タシギ、ハクセキレイ、タヒバリ、ツグミなどはいずれも動物食の鳥類である。枯れたマコモの稈が消失し、泥が露出することで地表面や浅い地中の小動物を採食しやすくなり、そのためにマコモ群落に飛来していたものと考えられる。1月3日の観察では、マコモ群落上で採食するマガモとオナガガモが観察された。両種は植物質が主食と考えられるが、繁殖期には動物質も摂食する。今回の観察では、マガモとオナガガモがマコモ群落上で何を採食していたのか、明確には確認できなかった。コハクチョウはマコモの地下茎に対し、強い採食圧を与える。しかし、嘴のサイズが大きいと、食べ残しも多く残るものと考えられ、マガモとオナガガモは、コハクチョウによってちぎられたマコモ地下茎の食べ残しを採食していた可能性が考えられる。あるいは、チドリ目やスズメ目の小鳥類同様に、マコモの稈の除去によって食べやすくなった動物質を採食していた可能性も考えられる。また、カモ類による採食行動が、1月下旬以降は見られなくなった理由は不明である。

菅生沼の開水面にはコハクチョウ、マガモ、オナガガモ以外にも多くのカモ類が見られた。しかし、それらのほとんどは開水面中央部や、種によっては開水面の岸よりの場所を利用していたりして、マコモ群落上で休息しているところは観察されなかった。オナガガモは休息時に陸上に上がるのを好む可能性があるが、潜水採餌型のカモ類や、水面採餌型のカモ類でも、今回多く観察されながら群落上に上陸しているところ

ろが観察されなかったコガモ *Anas crecca* などは地上での休息を好まないのかもしれない。

引用文献

- 小幡和男・飯田勝明・矢野徳也. 1996. 菅生沼の植生の現況と遷移. 森林文化研究17: 113-143.
- 渡辺朝一. 2002. 関東地方の池沼におけるコハクチョウの採食個体割合の経時変化. 日本の白鳥(26): 2-9.
- 渡辺朝一. 2003. 冬期のコハクチョウの地下茎への食圧がマコモ群落の翌春の被度に与える影響. 水草研究会誌 79: 13-16.
- 渡辺朝一. 2005. コハクチョウ・オナガガモの休息地としてのマコモ群落. Strix 23: 137-142.